

東北公益文科大学

総合研究論集

18

山形県庄内地方の産業組合運動と満州移民送出運動の思想
— 皇国農民団を中心に —

三 原 容 子

2010年7月20日発行

山形県庄内地方の産業組合運動と 満州移民送出運動の思想

— 皇国農民団を中心に —

三 原 容 子

1 はじめに

筆者はかつて「公益」を語る歴史的題材を検討した中で、山居倉庫を「公益倉庫」と呼んでよいのかについて論じた（三原2007）。その際に、山居倉庫は旧庄内藩士族らによる会社経営倉庫であって、それに対抗して産業組合が農民のための倉庫（農業倉庫）を設立するために闘ったことを次のように紹介した。

庄内の産業組合の農業倉庫設立の努力は、何度か失敗に終わったが、1933年、産業組合青年連盟全国連合会（産青連）が結成され、山木武夫、渋谷勇夫を中心に、庄内産青連の活発な活動が始まると、農民自身の倉庫を建設しようという機運が高まり、山居倉庫の妨害の中、1933年3倉庫を皮切りに次々と農業倉庫を建設していった。

産業組合は中央政府で設立計画や普及を始めたことに見られるように、もともとはかなり体制的な組織活動であったが、庄内では、危険な運動、反体制的な運動と見なされる状況があった。自分たちの倉庫を持ちたいという農民の動きが過激であるかに見られたのは、それだけ山居倉庫側の妨害活動が烈しかったことを物語るものと言えよう。全国的に見て特異な事例である。（三原2007：85-86）

庄内地方の既成勢力に対する闘いの中心にあった人物、山木武夫、渋谷勇夫は、満州に開拓民を送出した加藤完治の弟子である。1989年に建立された山木武夫顕彰碑（酒田市落野^{おちのめますほ}目十寸穂）の碑文には「大正五年県立自治講習所加藤完治先生に師事薫陶を享け人生観の確立した青年となる」と記され、題字は加藤弥進彦（加藤完治の三男）である。山形県は、長野県の38,000名弱に次ぐ、17,000名余りの開拓民・義勇隊を送出した県である（満洲開拓史復刊委員会：

464)。中でも庄内地方は三郡（飽海郡・東田川郡・西田川郡）の町村で庄内郷を建設しようとした分郷方式の先進地域であった。

右図は昭和19年6月1日現在の「山形県関係一般開拓団状況調」の表である。山形県1971：637-639から編団区域別戸数（合計2893戸）を区域別に表してみた。人口の多い村山よりも庄内が多いことが見てとれる。

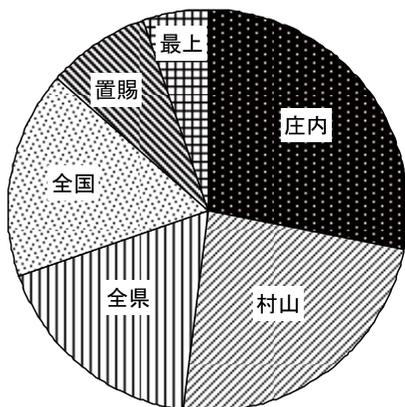
同一人物が農業倉庫建設に立ち上がった農民のリーダーであり、満州開拓送出の推進者である。両者はどのような関係になるのだろうか。従来の農業倉庫関係文献では満州開拓について触れられず、満州開拓関係文献では丸山

義二の小説『庄内平野』¹の主人公富樫直太郎の名前だけが突出してきた。庄内地方における農業倉庫と満州開拓に関する資料をできるだけ丹念に見ることによって、両方に関わった人々の思想を明らかにしていきたい。その作業の一環として、本稿では満州開拓民送出運動に関わる資料を整理したい。

満州開拓については戦後あまり語られて来なかった。庄内では満州へ誘った行為の重さと悲劇の大きさゆえに語られなかったという印象を筆者は持っている。大和村分村計画当時推進者の一人だった富樫義雄は、半生記を記述する際に、満州移民については「敗戦と共に末路悲惨に終わりましたので、この項詳述を避けたいと思います」と率直に述べている²。山木武夫の地元で編まれた伝記も、満州移民については一切触れていない³。

戦後65年、そろそろ語ることができる時期ではないかと考える。まずは戦前の史料をできるだけ探し出して整理してみたい。庄内の産業組合運動の「三羽鳥」、山木武夫、渋谷勇夫、富樫義雄の3名に、満州開拓の先駆者として全国的に名を知られていた富樫直太郎を加えた4名の人物を中心軸に、雑誌『弥栄』と、『拓け満州』『新満州』『開拓』を中心に史料を探った（以下、表示号数のみは『弥栄』、巻-号のみは『拓け満州』『新満州』『開拓』を表す）。今日実見

1944年6月1日現在の
山形県関係一般開拓団編団区域



できない史料を引用している文献については、それを利用した。

ここで、全国的にはもちろんのこと、地元においても今日では知る人が少ない4名の人物の生没年と出身地、略歴を示しておこう。

^{やまきたけお}
山木武夫 1893(明26).4.4~1983(昭58).10.11。東田川郡新堀村落野目。庄内農学校卒業、自治講習所第2期生、落野目信用組合組合長、県信用組合連合会理事、衆議院議員、新堀村長、酒田市会議員(議長)などを歴任。

^{しぶやゆうふ}
渋谷勇夫 1897(明30).3.15~1985(昭60).6.2。飽海郡北平田村久保田。庄内農学校卒業、自治講習所第2期生、北平田村収入役、北平田村信用販売購買利用組合組合長、酒田市会議員(議長)などを歴任。

^{とがしよしお}
富樫義雄 1899(明32).10.9~1974(昭49).2.26。東田川郡大和村連枝に生まれ幼少時に大和村小出土場に移る。高等小学校卒業。大和村会議員、大和村産業組合専務理事(のち組合長)、大和村助役、大和村村長、余目町長などを歴任。

^{とがしなおたろう}
富樫直太郎 1902(明35).4.28~1999(平11).11.7。東田川郡大和村連枝。高等小学校卒業。第十次楊宮囀子庄内開拓団団長、大和村会議員、公民館長、満洲開拓親子地蔵尊奉賛会会長など。

先行研究についてごく簡単に触れておく。佐藤愛「満洲農業移民研究~山形県農業移民を中心に~」は未完の卒業論文であるが、柚木駿一「[満州]農業移民政策と「庄内型」移民—山形県大和村移民計画を中心に」、武田共治『日本農本主義の構造』とともに、文献調査のガイドマップとして大いに役立った。山木武夫については刊行会『米よ組合よ故郷よ 山木武夫翁の生涯』、渋谷勇夫については北平田村の歴史を念入りに調査した菅野正・田原音和・細谷昂『東北農民の思想と行動——庄内農村の研究』、富樫義雄については富樫義雄その生涯と思い出刊行会『富樫義雄その生涯と思い出』が、富樫直太郎については満洲開拓親子地蔵尊奉賛会『満洲開拓親子地蔵尊』と富樫昭次『故国を指して幾百里 ある満洲開拓孤児の記録』が、それぞれ主な文献である。この他に地域史の刊行物を利用した。

以下、満洲移民送出運動と雑誌『弥栄』、1936年までの大和村皇国農民団、それ以後の大和村皇国農民団、庄内郷建設推進へと時代を追い、最後に分村運動の発火点である大和村の特殊性について触れる。

2 満州移民送出運動と雑誌『弥栄』

満州移民送出運動については、満洲開拓史復刊委員会『満洲開拓史（増補再版）』や山形県『山形県史 拓殖編』等によりほぼ明らかになっている。特に『山形県史 拓殖編』は、新聞記者を経て実際に山形県で事業に関わった経歴を持つ後藤嘉一の執筆によるため、記述が非常に詳しく貴重である。加藤完治に関する研究も膨大である。本節では庄内の運動を理解するために必要な状況を記し、さらに雑誌『弥栄』⁴の概要を見ておきたい。

開拓移民送出の動きは、1931年9月18日関東軍の謀略による満鉄爆破事件（柳条湖事件）以前からあった。

1915年に山形市に開設された県立自治講習所初代所長に就任加藤完治には学校運営方針が全面的に任されていた。第一期生はその年の暮れから翌年秋まで、第二期生から第四期生までは1月から7月（or 8月）まで、第五期生以降はほぼ一年間の講習となった。講習生の多くは県内各地の将来の地域リーダーを期待される青年たちで、修了生が「抑も講習所の生徒は其の多くは地方地主の子弟で労働の尊さ、汗の価値を真に解するもの少なく、他日農村の中堅としての資格を充分に具備せりと言ふ能はざるの憾あり」⁵と回想するように、生活に困る者は少なかった。農業経営を金勘定ではなく精神的営みと捉える加藤の教育方針はおおむね受講生に好評だった。

ところが、第六期生の庄内飽海郡出身の森谷壮吾、成沢喜代太郎、遠田三次郎の3名によって耕す土地のない次三男問題を問われた加藤完治は、朝鮮への植民を考え、萩野（現在新庄市）の開墾を考え、満洲開拓を考えるようになる。膝詰談判のエピソードは1921年12月頃のことと思われる。1923年に萩野の開墾が始まり、翌年の加藤の欧州視察後には自治講習所修了生に呼びかけて「朝鮮開発協会」を設立、修学旅行は朝鮮行きとなり⁶、1925年には修了生を中心とする朝鮮への移民が始まり、1926年には朝鮮開発協会第一回総会が、自治講習所同窓会（一笑会⁷）総会と同日に開催された。まさしく修了生とともに移民運動が進められたのであった。

柳条湖事件以後、農業移民の地が満洲に移った。同じ東京帝国大学農科大学出身的那須皓や橋本伝左衛門らの同志に加え、関東軍では石原莞爾という有力

な支持者を得て、満州への農業移民が可能であることを各方面に訴えていく。1932年2月に「朝鮮開発協会」は「満鮮開発協会」と改称した。五・一五事件で政党内閣が崩壊すると一挙に満洲開拓積極政策へと進み、1932年9月には早速第一次武装移民（試験移民）の募集と訓練が行われるようになった。

1933年、加藤完治は自治講習所同窓会誌『弥栄』3月号誌上で、政治を動かす力を得るために「同志を募る」と呼びかけ、翌年6月号に「皇国農民団の提唱」、「綱領」「規約」を発表した。その後、皇国農民団の団員名簿や団費納入状況等が毎月報告された。

なお、自治講習所は1933年より上山農学校と合併して県立国民高等学校となる。実質上は農学校の廃校、自治講習所の存続であった。この合併は上山農学校の側にとっては「いわゆる「維新の農道」を主張する特殊教義を捧持し、これに海外開拓精神を加えたもので、一般農村の社会通念と非常な距離があって、普通農家の営農改善を希求するものの就学意欲をうけいれないような傾向」（創立五十周年記念誌編集委員会1962：97）と不満であり、7年後に一般の農学校に「復帰」した⁸。『弥栄』の発行所は、合併によって自治講習所内から県立国民高等学校内に移ったが、1年余り後に同窓会本拠の変更により茨城県の日本国民高等学校に移った。

加藤の意図は実現に向かい、1936年には、20年間（1937年～1956年）に100万戸の農業移民を送出する計画が閣議決定された。満州の予想人口の1割を日本人が占めるために必要な人数を農業移民によって満たそうと割り出された数字だった。満洲開拓が国策となると、拓務省、満州移住協会などの実施機関の整備も急速に進んでいった。

内地の村の過剰人口を集団的に満洲に移す分村計画としては、宮城県遠田郡南郷村、長野県南佐久郡大日向村、山形県庄内地方の三ヶ所が有名である。その中で庄内地方の場合は、東田川郡大和村の分村計画が二市三郡を合わせて庄内郷建設をめざす分郷計画に発展したところに特色がある。庄内郷分郷計画決定を機に県内では郡単位の分郷運動が進展していくが、やがて戦時下、労働力不足（賃金アップ）等の事情により満洲移民送出手は困難になっていく。

敗戦後、皇国農民団は解散、『弥栄』は廃刊となる。加藤完治は、「我等は必ずしも皇国農民団を解散せねばならぬとも思はなかつたし、機関誌弥栄を廃

刊にする必要があるとも考へなかつたが、時とすると此の皇国とか弥栄とか言ふ名前が極端なる国家主義の如くに誤解さるゝ憂がないとも限らなかつたので、之を解散し之を廃刊にして茲に新に公道を發行することにした」⁹と語っている。

さて、『山形県史 拓殖編』には庄内郷建設について次のようにまとめられている。次節以降では当時の史料を使って具体的に見ていきたい。

「庄内郷」建設計画は最初東田川郡大和村の単村分村計画から発展した。これを立案したのは加藤完治が山形県自治講習所長時代に、その薫陶感化をうけた農村青年達によって結成された「皇国農民団」であった。大和村では土田嘉右エ門（後に第八次馬太屯団長・県議会議員）・富樫義雄（後に大和村長・余目町長）・富樫直太郎（後に第十次揚営子団長）等が中心となったが、庄内分郷計画に進展してからは、同郡新堀村の山木武夫（後に衆議院議員・県農協連会長）、飽海郡北平田村の渋谷勇夫（後に庄内経済連会長）等の皇国農民団幹部がこれに参加し、全庄内の運動となった。（山形県1971：507-508）

3 皇国農民団設立以前

1917年に自治講習所を修了した第二期生22名中で、山木武夫と渋谷勇夫は早くから重要人物であった。1924年に組織された加藤完治を中心に組織された「朝鮮開発協会」の理事と監事は合わせて11名で（加藤を含む）、小平権一、山崎延吉、那須皓、橋本伝左衛門らと並んで卒業生5名の名があった。（127号（1933年3月）：78）。萩野の開墾の父となった高橋猪一と金井村長の五十嵐政次郎（一期生）、天童の西沢忠右衛門、山木、渋谷（二期生）である。1932年2月に「朝鮮開発協会」が「満鮮開発協会」と改称された際に選ばれた地方委員15名にも、山木、渋谷は入っている（116号（1931年3月）：26-28）。大高根道場寄附金報告（山木が最高額の50円）や、自治講習所と上山農学校の合併記念号の回想にも、二人が出てくる。

他の事柄との関連が不明であるが、富樫義雄が1928年の日記に萩野の開墾や加藤完治について記しているのので、引用された伝記の一部を抜粋で紹介したい。（3月5日分は富樫義雄1986：36、それ以外は富樫義雄1986：43-44、）。

2月8日「十一時半、狩川より汽車にて余目行き更に新堀小学校に加藤完治先生、橋

本農学博士の講演を聴く。加藤完治先生は、荘内の農民が拓殖には覚めず、現状を持続する時は数年を出でずして行き詰まるであろうことを断言する、と。」

3月5日「加藤完治先生の記事（弥栄） 農業労働は神聖なものである。而して真剣な厳粛なものである。武道と等しく農業労働そのものの中には自ら人格鍛錬の要素が含まれて居る」

7月30日「（月曜） 天気晴れ、萩野開墾視察のため、午前六時出発、自転車にて強東風に向い勇敢に出発。一行二十五名、外汽車行四名、午前十一時、萩野着、農園視察、昼食の馳走にあずかり、后、西垣先生、清水及衛先生の講話拝聴、五時二十分、同町発帰途につく。夜十二時帰宅。」

8月18日「夜、富樫直太郎氏訪問、小林徳一氏と三人にて最上郡萩野に共同農園設定に計画をなす。」

8月19日「后二時四十分余目汽車にて新庄に赴き、更に自転車にて萩野開墾地に至り屯所に宿し、夜、高橋猪一先生と懇談する。」

8月20日「前四時半起床、朝仕事馬鈴薯掘りの手伝い。朝食後屯所を發し、途中、星川氏を訪ね払下地のことにつき懇談し、前十時半同所を發し自転車にて帰途につく。」

8月21日「后、大和村役場に至り、皇民会講演会の準備をなす。夜、富樫直太郎氏宅にて懇談会。」

この年、後藤静香の講演会を開いたり岡本利吉の講演を聴きに行ったりしている富樫義雄であるが、同時期に加藤完治、橋本伝左衛門、西垣喜代次、清水及衛、高橋猪一らと会っていること、すでに加藤の運動に共感を抱いていたことがわかる

もう一つ、朝鮮を舞台とする「庄内郷」構想がかなり早くからあったという話を座談会の山木武夫の言葉で紹介しておく（「分郷計画とは何か？山形県の人々に聴く座談会」（3-5（1939年5月））。

一体庄内郷と言ふ話は今からもう十何年と言ふ前に加藤先生の話があつて、橋本博士と私と渋谷君が朝鮮に土地を買ひに行つて二万四千町歩を買つて来たつもりだつたのですが、ブローカーが入つて有耶無耶になつて終つたが、それに庄内の人を送ると言ふ事になつてゐたのです。処が駄目になつたのでその後朝鮮の群山、平康に送る事に加藤先生の話が出て来たのです。……〔第一次弥栄村、

第二次千振村では退団者あり一時下火] ……そこへ大和村が動き出し本格的に分村計画を樹て初めたので庄内郷と言へば直ぐ大和村の名前が出るが、歴史は古いのです。もう私としては庄内郷ではくたびれる程やつて来たので今度は富樫君の様な若い新しい人々に存分やつて貰ふんです。

4 皇国農民団設立以後

加藤完治の「皇国農民団」呼びかけは1934年6月だった。入団申込み者で圧倒的に多いのが国民高等学校地元の茨城県内である。初めて団員名簿が掲載された146号（1934年11月）によれば設立以来の団員数が県内285、他府県207、合計492名（実際に名簿で数えてみたところでは県内281、他府県162、合計443名）。他府県は、埼玉県比企郡玉川村50名など、集団参加が多い。山形県からは20名（庄内からは4名）が掲載されている。次の147号（1934年12月）で庄内から加わった3名中の一人が富樫直太郎であった。

1936年4月28日「山形県東田川郡大和村に於て懇談会」が開催された（164号（1936年5月））。富樫直太郎によれば、「私達の農民団は本部の阿部先生が昭和十一年の早春こんな遠い東北の寒村にひよこつりと御出でなられまして村を憂へて居る同志十数名が小学校の宿直室で爐を囲んで「日本精神」の御話を御聞き致しましたのが誕生」（193号（1939年2月））とあり、165号（1936年6月）の新入団員欄に大和村から富樫義雄を含む18名の名前が一挙に挙がっているので、この会合を皇国農民団関係の最初の集まりと見てまちがいない。

1936年8月23日～25日、大和村小学校で「農道講習会」が開催され、最終日に大和村皇国農民団が誕生した。その時の様子は以下の通りである。加藤完治も参加した。

山形県に於て皇国農民団主催の下に農道講習会が開かれたのは大和村を以つて初めとする。主催者側に於てもこんなことには殆んど経験のない純百姓丈けの手でやつた仕事なのだから果してどの程度に趣旨が徹底するか多少心配の念を抱いて居たが、愈々当日になつて約九十名の真面目な青年が遠近から集つて来た時は何んとも云へない悦びと感謝で満された。斯く多数の講習生を擁しながら何等の歩調も乱れず、整然たる中に、未だ嘗てこうした真剣な講習会に参

加したことはなかつたと感激の言葉さえ多くの受講生から聴くことを得たことは、鳥海の霊峰を眺めつゝ、最上の清流に禊することの出来る環境と相俟つて団員諸兄の至誠と献身的な奉仕の賜であつた。斯くして当団が此の講習会を契機として弥々発展を見るに至ることは、単に庄内三郡に止まらず、広く県下に与ふる影響の甚大なるを思ひて、一層の自重自任を祈らざるを得なかつたのである。当団に於ては加藤団長の御来講を好機会に、廿五日の講習終了後、莊重なる発団式を挙行引き続き講演会を開催、多数の熱心なる聴講者を迎え非常な盛會を極めた。当夜は本部幹部出席の上、全団員と懇談をなし、大和村皇国農民団今後の活動方針に就いて種々協議を行ひ、得る所多大なるものがあつた。(168号(1936年9月):58-59、「皇国農民団本部報」より)

この機会に大和村から多数入団したと見られ、169号(1936年10月)に大和村の新入団員12名の名前があり、土田嘉右衛門や小林徳一も見える。

1936年11月29日、大和村皇国農民団臨時総會が開かれた。議案中「昭和拾二年度事業」全文は以下の通りである(173号(1937年2月)、(適宜句読点や改行を加え、明らかな誤字は訂正した)。

1、団員募集の件=支部団員を一百名となす事

現在三十一名、加入決定八名、不足六一名、不足分を廻館一〇名、南野一〇名、古関一〇名、沢新田八名、連枝四名、赤渕新田三名、小出新田六名、堤新田五名、外婦人五名の割合に募集せんとす、募集は七月末日迄、八月入団式。

2、分団組織の件 拾名以上の支部会員を有する部落に組織する事

3、団員共同労作実施の件 各分団に於て適宜実施する事

4、村民弁論大会開催の件=男子青年団と共同して行ふ

イ、期日 二月五日午前九時より

ロ、場所 大和小学校

ハ、出演人員 拾名——拾五名位

ニ、其他 各戸にビラ配付又各部落にもビラを張る事、出演者にタオル一本づゝ呈する事

5、時事問題に関し研究討議座談会開催の件 年四回位開催する事、実行方法は役員會に於て協議決定する事

6、名士の講演会開催の件

皇国農民精神の普及、徹底を計る為め年一回村農会、産業組合男女青年団
其他団体と協同開催の事、講師は皇国農民団本部員、友部国民高等学校の
先生、農村更生協会係員、上ノ山国民高等学校長其他の中より招聘する事

7、農道講習会開催の件

イ、期日 八月中

ロ、場所 大和小学校

ハ、講師 前年同様

ニ、講習生の募集庄内二市三郡内より八拾名

8、満洲に大和村建設並之が実施方法の研究調査の件

イ、満洲移民に関しては本村に設けらる二、三男女会及教化部其他の団体
と連絡提携して実行する事

ロ、友部及上ノ山の国民高等学校其他関係方面に関し調査研究する事

9、支部団報発行の件

年一回以上支部団報の発行を実施する事

但し本年は便宜上男子青年団と共同発行をなす事

将来村報発行の際は支部報も登載する事

臨時総会で決まった1937年度予算によれば、総収入247円のうち50円が団
費（団員100名分）、65円が村補助、35円が農会補助、50円が産業組合補助、
47円が寄附金である。合わせて50円が村の機関からの収入であることに注目
したい。支出は農道講習費78円、研究調査費55円などとなっている。

まもなく大和村から団員がさらに24名加わる（176号（1937.5.10））

1937年8月11日～14日、前年の臨時総会で決めたとおり、再び農道講習会
が開催された。「庄内二市三郡の有志に参加を求め七十二名の受講者あり非常
に盛会であつた。講師としては特に御忙しい中を本部より加藤先生、阿部重岡
両先生上ノ山国民高等学校西垣先生御出下され、一同は神ながらの心を体して
左の如く日程が進められた。」（178号（1937.9））。四日間にわたって、4時起床、
10時就寝、最上川での禊、講義受講、農場実習などが行われた。

1937年の一年間を記録した大和村皇国農民団報「やまと」第1号（1937
年12月）がある。貴重な史料であるが実見できないので、以下、富樫義雄
1986：131-133より引用して示す。適宜改行等を加え、また、月日は算用数字

に変えた。

1936年11月29日臨時総会で選ばれた役員

団長、土田嘉右エ門、副団長、富樫直太郎、幹事、押切光繁、小林末治郎、奥山吉郎、阿部又右エ門、長南鉄弥、石井政春、工藤長松、富樫義雄、高橋末広、奥山喜之助、
(以下1937年)1月10日 役員会開催、

一、団員募集の件、本年度内百名とする。

八、満洲に大和村建設に関する件。

2月12日、協議会、

一、満洲移住協議会松川主事講演会開催の件。

二、満洲に大和村建設に関する件。

2月21日、役員会開催、

一、移植民長期講習会開催の件、名称を「皇国農民講座」とす。

3月18日、協議会開催、

二、移民計画の実行方法に関する件。

4月4日、役員会開催、

一、土田団長より三月三十一日、県社会課にて満洲移民に就いて打ち合わせ
たる状況報告。

二、富樫副団長より移民計画に関し之迄の募集方法について説明。

4月10日、役員会開催、 一、満洲移民に関する件。

附、移民講演会第一回理事会の決議を土田団長より報告。

4月22日、拓殖一夜講習会。

4月23日、満洲移民映画会開催。

4月29日、第六次先遣隊員小林末治郎、阿部又右エ門、両君の壮行式挙行。

5月23日、満洲移民の映画とお話の会開催。

7月16日、役員会開催。 附、七月十日農村更生協会主催の分村計画座談会状況報告。

8月10日、総会開催

七、団務報告 1、本団事業報告、2、団員、分団に関する件、3、満洲移民関係、

4、移植民後援会関係

8月11日、農道講習会開催。八月十一日より三泊四日間

8月18日、富樫堅治、岩城吉之助、長谷部伝太郎、長南義雄君等の召集入営の

送別会開催す。

8月31日、少年移民壮行式挙行。長南惣治郎、森居末治、菅原真嗣、小林元作、樋渡民治、渡部菊治の六名。

9月5日、農村更生協会塩田先生来村を機とし村内一般座談会開催す。(農村問題、移民問題等) 9月12日、役員会開催。

9月13日、中村義右エ門、渋谷仁助、斎藤吉郎君の送別会を開催す。

9月17日、茨城県立農民道場生を迎え座談会開催す。(小出新田公会堂に於いて)

一、農民団の活動状況説明(奥山喜之助)

一、村勢に付き説明、(富樫義雄)

9月23日、副団長富樫直太郎満洲視察出発。

9月29日、富樫副団長拓へ稲刈手伝い。期日二十九日より向う十日間。

10月18日、副団長富樫直太郎氏移民地視察慰問報告並びに歓迎会を催す。

1937年12月現在の役員 団長、土田嘉右エ門、副団長、富樫直太郎、幹事、富樫義雄ほか七名、満洲大和村分村員、三十六名、農民団員で移民者、八名

ちなみに、この頃の県の満洲開拓推進の姿勢については、次のように高く評価されている。「昭和九年知事〔武井群嗣〕を会長として拓務協会を設立し、昨年〔1937年〕よりは拓務主事を置き、…」「十一年八月全国最初の移住地視察団を組織し一行二十四名にそれぞれ九十円づゝの補助金を交付し、続いて昨年も第二回視察団を送り、これ等五十名近い人々を地方委員として移民運動に当らしめて居るから働く人は豊富である。」「又十一年には五十円づゝを補助して県下に二、三男会を組織せしめたが、その数は既に百を超えて居り、昨年からは町村に満洲移民後援会を奨励して居る。」「この外分村計画を県經濟部と協力して奨励し」「県をあげての一大運動となるに至つた。」(2-2 (1938年2月)「<拓け満蒙地方めぐり>山形県の巻」より)。1936年に実施された全国発の視察団については、3-6 (1939年6月) 後藤嘉一「泥んこの花嫁 全国最初の開拓地視察記」が詳しい。

こうして大和村では満洲移民のための後援会が組織され、計画が作られていく。「大和村満洲移植民後援会規約」(前述の「やまと」第一号掲載)は「十五ヶ条からなり、事務所を大和小学校に置き、会員は正会員、賛助会員、移住会員、準会員に分かれ、会長は村長、副会長は皇国農民団長、理事は助役、青年学校長、

農会長、産業組合長、同専務理事など」(富樫義雄 1986 : 134) とあり、村組織が一丸となつての組織であることがわかる。「大和村移民計画」の当初案(団報「やまと」掲載)では、総農家戸数467戸、耕地面積890町、飽和農家戸数297戸、過剰農家戸数171戸と新分家30戸と計算し、201戸を1937年度～1941年度まで30～51戸ずつ移住させるというものだった。1939年1月に確定した分村計画では、標準農家耕地面積を2町5反とし、総農家戸数457戸中過剰農家は95戸、農家以外の過剰戸数52戸、計147戸(廻館44戸、南野23戸……堤新田1戸)となった(大和村1990 : 69)。移住者の財産処分方法、移住者の負債整理、元村の更生計画、元村分村間の提携等も具体的に詰められた。

計画推進に富樫直太郎と並んで働いたのが富樫堅治(富樫義雄の弟)である。1937年8月に召集された富樫堅治に代わって、団報「やまと」に高橋末広が概況報告をしている。

「分村計画を実行するに誰が先頭に立つかと言うことに就いて本団に於いて度々協議しましたが、幸いに、富樫堅治君が大変よい環境にありましたので、同君から此の際断然起って戴くことに御願ひ致しました。その当時は同君もすっかり移民すると言う腹になり兼ねて居ったようでありましたが、本年(註、昭和十二年)三月六日満洲移住協会主事、松川五郎先生の来村を得て、宮城県南郷村の分村計画の実状を拝聴して、本当に腹を定め、尚三月二十四日から同二十七日迄の三泊四日間日本国民高等学校に於いて開催された皇国農民団本部の農道講習会に出席受講して、愈々本格的に分村移民計画の実行に着手致しました。

同志を糾合するには各部落を歴訪して、膝を交え胸襟を開いてお互いに語り合うのが一番得策だろうと考え、三月十九日連枝部落を始めとして順次各部落を訪問した結果、予期以上の大成績を挙げ得たことを一同喜んでいる次第であります。

此の大事業を達成する裏面には血の滲む様な活動を続けた富樫堅治君、富樫直太郎君には文字通り実に連日連夜、一日でも募集を怠ると寝心地が悪いという程の張り切り方で、満洲移民の必要を力説したり、或は同志の家庭を訪問して親兄弟を説得したり真剣勝負で奔走せられた結果でありまして、当時を追想して私共は感慨おく能はざるものあります。」(富樫義雄 1986 : 138)

団報「やまと」掲載の富樫直太郎「皇国農民団の生まれたる理由」からは、富樫直太郎が加藤完治の考え方に傾倒している様子がわかる。

「我が崇敬の日本農民の慈父加藤完治先生の御提唱なされた団体だからには、一もなく二もなく絶体信じて間違ひない団体なのである。否陛下の赤子としての日本農民なら是非入団せねばならない義務があると思ふ。団費がどうのこうのと批判する男なら日本文明、日本精神の判らない者と断言して絶対に間違ひないのだ。……」（富樫義雄 1986：138、積雪 1941：2）

大和村から満州への分村運動がぐんぐんと進められていった。1937年末から1938年にかけて、富樫直太郎は「分村運動の戦塵を浴びて」と題して3回、意気軒昂たる文章を掲載している。

「いよいよ大和分村の先遣隊四十名の同志は上ノ山国民高等学校にて訓練中だ。……村の皇国農民講座で鍛へられただけに同志の誓は益々固い」（2-1（1938年1月）：40）

「先輩同志があんまり大和村分村運動を吹聴するのでめつきり分村視察に参つて下さる方々が多くなつた。」「同志十名は三月二日設営隊として村から出発した。妻子を残して行く方々の眼には汲まねばならぬうおいがある。」「月末には二十六名の同志がまた出発するが、十七日には苦勞してまとめた花嫁さん十二組の結婚が本県知事御夫妻の媒酌で厳肅に行ふ事になつた。昨春花嫁さんを募るのピラを撒いたせいでもあるまいが、村の娘さんの満洲認識つたら素敵なものだ。」（2-5（1938年5月）：41）

「事変に依る相当の兵士と田植最中の徴発馬壺百頭、分村移民四十名義勇軍十名一斉に出た村だが、まだまだ手持無沙汰の人々は村に充満して居る次第。」（2-11（1938年11月）：32）

1938年の3月17日、県知事夫妻媒酌の下に大和村小学校で举行された12組の合同結婚式の蔭の仲人もまた富樫直太郎であった。（2-5（1938年5月）「大陸へ嫁ぐ大和撫子 山形県東田川郡大和村 十二組の合同結婚記」）

1937年に展開した大和村皇国農民団運動の活発な状況は次の山形県の団員数グラフでも窺える。途中の号数が抜けているが、1937年に急増している様子がわかる。この時期の全国の合計数はなだらかに増加していた。

会へ来てくれ』といふ事になり、翌十一月八日満洲移住協会の理事室で、庄内分郷計画の樹立について橋本、加藤、佐藤、永雄各満洲移住協会理事、野々山同訓練部長、農村更生協会国枝理事、拓務省浅川技師、満拓生駒理事、農林省遠藤事務官、庄内代表山木、渋谷両氏等が集り種々協議を進めました。先づ山木、渋谷の両氏から庄内分郷計画について縷々説明があり、各方面から質問や意見の開陳があり、話はすらすらと進んで先づこゝに満洲庄内郷建設のプランはなごやかに出来上りました。…〔中略〕…このやうにして庄内分郷計画（第一次三ヶ年千五百戸）が中央で決定されるや、山形県では先づ柴田主事、西垣国民学校々長を上京せしめ種々中央と連絡の上庄内分郷打合せ会の準備を進めました。…〔中略〕…かくて庄内打合せ会は、十一月十七日酒田市（郡農会）に於て開かれる事になり、満洲移民視察者を主として…〔中略〕…庄内三ヶ所農閑期に入つた農民達は加藤先生の熱弁に耳を傾けたのでした。…〔中略〕…熱弁の未ださめぬ吹雪の庄内へ次いで『庄内分郷計画基礎調査』の調査団が派遣される事となり、農林省一、雪害調査所一、拓務省一、帝国農会一、連合青年団四、農村更生協会一、満洲移住協会一の十名のメンバーを以て、三班に別れて一月二日出発、三日に夫々村に入つて、十一ヶ所二十二戸の安定農家に就いて種々調査を完了しました。新年早々、しかも吹雪を衝いて、斯くも広範囲になされた調査の結論は極めて意義深く且貴重なものであつた事はいふ迄もありません。

また、1939年4月1日に酒田で行われた「分郷計画とは何か？山形県の人々に聴く座談会」（3-5（1939年5月））に出席した山木が、同じ事情を別の言葉で語っている。

庄内人は、マテ（鈍重）なもので、……自然他府県の人の中に這入ると始終、庄内人だけがかたまつた様になるのです。……一満洲移民に就いても庄内人だけで纏まつた村を作ると云ふ氣運になつた訳であります、それに就いて、一昨年^{はる}の春でしたか、私共が上京して加藤先生と橋本伝左衛門博士にお会ひして、私共は熱心に、それを主張し、いくら庄内人がマテでも、それはそれで特別の味があると云ふので、たうとう加藤先生も承諾された訳であります。こゝに初めて方針が立つた訳であります。そして昨年の一月份になつて農林省その他で庄内に調査にやつて来て、分郷計画が具体化したのであります。渋谷君とも分担をきめて、やつて居りますが、私は表面には出ません。

庄内分郷計画は、やがて進行にブレーキがかかる。その事情には産業組合運動（農業倉庫建設運動）が絡んでいることを後藤嘉一は指摘する。

元来、この運動は皇国農民団によつて起され、今後とも運動の中心は皇国農民団の有志によつて進行して行くべく約束されては居るが、然し全庄内郷の運動とする為めには一部有志の手だけによつて専ら行はる可きでは無く、既成の各機関が協力一致しなければならぬと云ふので、先づ町村長、農会、産業組合、学校等の幹部が、何れも役員に就任する事となり、その会長には飽海郡農会長本間光勇氏が就任する事となつた。……これ〔本間光勇〕に対立する産組側の中心たる山木、渋谷等の皇国農民団側とは両立し得ない溝があつた。それにも拘らず、本間氏を会長に戴かなければならぬ所に、庄内地方の政治的、経済的特異性があり、本間家諒解なしには如何なる事業も運行出来ないと云ふ事実を裏書きした。

その後の運動は事実、両富樫、山木、渋谷、土田、工藤等の、革新的青壮年によつて進められ、一方、会長は、逆に、庄内農業の特異的集約性を楯にとつて、青年層の離村に反対さへして居たのであつた。……

〔労力不足を嫌う〕地主階級と、分郷運動者との間には一層、深い溝が掘られ、協会の内部分裂は更に深刻化し、本間会長並に幹部役員たる町村長、農会長等は全く分郷運動から離脱してしまひ、単に皇農系の一部有志だけの運動に墮してしまつたのである。(5-8 (1941年9月) 後藤嘉一「分郷運動の再検討 翼賛運動として再建された庄内郷」)

運動は再検討されて、「本間会長と実践者側とが去る六月上旬酒田市に於て会談した結果、漸やく意見の一致を見」、1941年6月23日に庄内郷送出計画が決定した。

1943年2月20日に山形県庁で開かれた座談会で、第十次庄内郷開拓団長の肩書きで出席した富樫直太郎は、満州移民送出運動が躓いていることを認識した上で、「皇国農村の本旨に目ざめて来れば、当然、皇国農民の使命として、満洲開拓を考へずには居られなくなる。」「農民の使命は、食糧を国家に捧げると云ふ所に進まなければならない。」と語り続けている (7-4 (1943年4月)「座談会 決戦下の満洲開拓」)。

6 大和村を庄内の農村の代表と見てよいのか

柚木1977等の経済史家の先行研究に多く見られるのが、稲作単作地帯の社会経済構造と移民送出の関係を解明したいという問題意識である。庄内地方に関する文献を読み漁っている筆者としては、素朴な疑問を抱かざるを得ない。耕地面積や平均収量、小作料などの数値は、広大な庄内平野の中では共通する部分が多いにもかかわらず、満州移民送出数には村によって大きな差が生じている。東田川郡大和村の運動が突出したことには、社会経済構造以外の要因も大きいのではないだろうか。

庄内地方は旧庄内藩勢力支配が継続したことに特色があるが¹⁰、大和村周辺は旧松山藩領であり、近隣地域や山木武夫の新堀村落野目は旧天領の時期が長く、旧支配勢力の影響が少ないなどの事情が、明治以降の運動にも影響を及ぼしているかもしれない。ここでは史料調査の途上で見つけた大和村の特徴に関わるとされる事項をいくつか紹介したい。

大和村は早くから産業組合運動が盛んだった地域である。1908年に賃金貯蓄組合、翌年に報徳社が結成され、1912年に両者が合体して有限責任大和信用組合が発足した。大規模な農業水利工事や耕地整理事業で入ってくる労賃の一割を貯金するところから始まったのである（富樫義雄1986：77-85）。有限責任大和信用組合は県下の優良組合として発展し、1923年には購買事業を加えて大和信用購買組合と改称、やがて区域内全戸加入を定めた。

こうした動きは富樫義雄に影響を与え、「明治四十五年小出新田を中心に産業組合がつくられた頃、富樫義雄は小学校の高等科に進んでいた時代で、小学校卒業後は太田文助などの先輩に夜学校で教えを受けたのであるから、彼の思想と行動の中に産業組合を中心に農民の福利厚生と農業の発展をはかろうとする意欲が強まったことは当然で、彼の後年の産組運動の土台となったものと言える」（富樫義雄1986：82）と書かれている。20代で村会議員となった富樫義雄は、組合の職員を兼務して（30代で専務となり）村政と産業組合の両方に腕を振るうようになった。

1931年の経済更生指導村指定、1935年の教化村指定、同年の負債整理組合設立、1938年の満州分村計画樹立、1939年の適正小作料制定は、大和村における村

行政と産業組合との一体化により可能だったと言えよう。

ところで、大和村連枝の富樫直太郎の名前が、満州開拓民送出運動とは別のところで、一つは最先端の複合農業者として、もう一つは村の共同農業のリーダーとして登場するのが興味深い。

大和村から遠方の西田川郡大泉村の小作農家の日記を分析した中に、1931年5月に富樫直太郎が登場する。経営多角化の見本の新しい経営であったらしい（田崎1982：204）

「御大典」（1928年）を記念して連枝に設立された村づくり団体「興邑社」によって、倒産した鶴見農場の土地を取得し共同耕作地にすることを提唱したのが富樫直太郎だという。直太郎はまず永小作権を手に入れ、1935年の競売時には私財を立て替えて落札、2年後に、農山漁村経済更生特別助成事業による起債によって連枝農事実行組合（実質は興邑社）の財産となった（沢新田連枝部落史編集委員会1999：35）

能力があり勤勉であり熱意のある人々が動きやすい状況があった村ということなのではないだろうか。

7 おしまいに

『弥栄』と『拓け満蒙』の記事数編ぐらいしか庄内の皇国農民団運動に関する史料がないだろうと思いきや、先行研究の関係部分をピックアップするだけでかなりの分量となることがわかった。そのすべてを抜粋するには相当の紙数を要する。まずは網羅的に史料集を作成することが必要だろう。本稿では限られた紙数の範囲内での史料集をめざしたのだが、コンパクトにまとめるには、まだまだ筆者自身の理解が不十分であることを痛感した。未熟な段階で公にすることを心苦しく思う。まだ研究の入口の試行段階である。今後さらに史料と考察を加えることによって実証的な研究成果をまとめたいと考えている。

なお、『弥栄』や「自治講習所講習生名簿」等の閲覧を許してくださった上山明新館高校の皆さん、ご自身が満州引き揚げ者であり現状を聴かせてくださった庄内町立図書館前館長日野淳さん、富樫直太郎曾孫の高橋紀子さん、山木武夫の伝記を編集された山木恭一さん、研究開始時にアドバイスをくださった

農本思想研究会の皆さんにお礼を申し上げる。最後に、科学研究費（代表：岩崎正弥、テーマ：農本思想の現代的意義に関する研究）による共同研究の一環であることを付記しておく。

-
- 1 本間喜三治1940：は『庄内平野』の批評で「愆をいへば、大和村運動の大きなバックとなつてゐる者は、加藤完治氏の直弟子であり、庄内農学校の先輩である北平田村の渋谷氏や、新堀村の山木氏である。更に庄内の最も大きな特殊性は、本間家対産業組合の宿命的な闘争である。それは言葉をかへていへば、本間家の山居倉庫対渋谷、山木の農業倉庫の闘争である。丸山氏がもし渋谷、山木両氏の存在を知りこの描写に努力されたならば「庄内平野」は最つと光芒をはなつたことであらう。」p.270と注文を出している。
 - 2 1964年の農協広報紙「農業やまと」第9号の「組合の事跡」（八）（富樫義雄その生涯と思ひ出刊行会1986：139より重引）
 - 3 刊行会1989
 - 4 『弥栄』（第1号（1922年2月）～第259号（1945年6月））の所蔵状況については、茨城県内原の日本農業実践学園（日本国民高等学校協会）に揃っているとの情報を得た。しかし、筆者が調査したのは現在のところ、横山敏2002の資料リストに掲載されていた上山明新館高等学校所蔵並に山形県立図書館所蔵の次の号数のみである。筆者の調査が不十分であるためか、横山2002掲載の上山明新館所蔵資料の多くを探し出せなかった。第56号（1926年12月）～第180号（1937年11月か?）（但し第149号、第150号を除く）、第193号（1939年2月）～第240号（1943年8月）
 - 5 中川亮一「思ひ出の記」『弥栄』第127号（1933年3月）、中川は第五期生。
 - 6 自治講習所の状況については、自治講習所が上山農学校と合併して幕を閉じる「記念号」である『弥栄』第127号（1933.3）に、第一期～第十七期の修了生の回想や各期の年間スケジュールがあり詳しい。また短期講習を含む全修了生の名簿が上山明新館高等学校に保管されていて、生年月日や年齢、学歴、戸主との関係等の書込みがある。自治講習所教育の雰囲気については第一期生の「自治寮日誌」が残っており、毎日当番によって天候や動静（講習生の帰省や帰所など）が克明に記されている。県内の出身階層的にも能力的にもエリート層が集まり活き活きと学ぶ様子がうかがえる。
 - 7 自治講習所同窓会は「一笑会」、『弥栄』はこの会の機関誌である。一笑会については、創立五十周年記念誌編集委員会1962：79-80にまとめがある。詳細については高橋猪一「一笑会」（『弥栄』第127号（1933年3月）参照）
 - 8 創立五十周年記念誌編集委員会1962の執筆は上山農学校の出身者で『山形県史拓殖編』の著者後藤嘉一である。

⁹ 中村政則2005：203より、『公道』創刊号より「公道の創刊に当つて」より。解散決意は8月31日、通知は10月3日付。

¹⁰ 三原2007参照。

参考文献（雑誌）

- ・『弥栄』第56号（1926年12月）～第180号（1937年11月か?）（但し第149号、第150号を除く）、第193号（1939年2月）～第240号（1943年8月）
- ・満州移住協会『拓け満蒙』（1936年4月～1939年3月）、『新満洲』（1939年4月～1940年12月）、『開拓』（1941年1月～1945年1月）、（復刻）不二出版

本文中で触れた文献（雑誌以外、著者名五十音順）

- ・刊行会『米よ組合よ故郷よ 山木武夫翁の生涯』1989年8月
- ・菅野正・田原音和・細谷昂『東北農民の思想と行動——庄内農村の研究』御茶の水書房、1984年2月
- ・佐藤愛「満洲農業移民研究～山形県農業移民を中心に～」（新潟大学卒業論文）2007年1月
- ・沢新田連枝部落史編集委員会『沢新田・連枝部落史』、1999年3月
- ・積雪地方農村経済調査所編『満洲農業移民母村経済実態調査 山形県東田川郡大和村』1941年
- ・創立五十周年記念誌編集委員会『山形県立上山農業高等学校五十年史』1962年12月
- ・武田共治『日本農本主義の構造』創風社、1999年9月
- ・田崎宣義「小作農家の経営史的分析：一九三一・三～一九三六・二」『一橋大学研究年報 社会学研究』21、1982年8月
- ・富樫昭次『故国を指して幾百里 ある満洲開拓孤児の記録』東北出版企画、1979年12月
- ・富樫義雄その生涯と思い出刊行会『富樫義雄その生涯と思い出』1986年10月
- ・中村政則「資料紹介 加藤完治・満州移民の戦後史」、神奈川大学日本常民文化研究所『歴史と民俗』第21号、2005年3月
- ・本間喜三治『開拓民運動のために』清談社、1940年8月
- ・丸山義二『庄内平野』朝日新聞社、1941年4月
- ・満洲開拓親子地藏尊奉賛会『満洲開拓親子地藏尊』1982年3月
- ・満洲開拓史復刊委員会『満洲開拓史（増補再版）』1980年8月（復刊原本は1966年、満洲開拓史刊行会編）
- ・三原容子「公益考（二）——庄内地域史の取扱いについて——」『東北公益文科大学総合研究論集』第12号、2007年6月
- ・三原容子「公益考（三）——公益に関する題材の検討——」『東北公益文科大学総合研究論集』第14号、2008年6月

- ・山形県『山形県史 拓殖編』1971年
- ・山形県自治講習所「大正四年以降講習生名簿」（上山明新館所蔵）
- ・大和郷土史編集委員会『大和郷土史』1990年8月
- ・柚木駿一「「満州」農業移民政策と「庄内型」移民—山形県大和村移民計画を中心に」『社会経済史学』社会経済史学会 42（5）、1977年3月
- ・横山敏「山形県自治講習所・山形県立国民高等学校等の史料について——加藤完治の山形時代を中心として——」（武田共治（共同研究代表者）「戦前期の山形県庄内地方における農本主義運動に関する実証的研究（報告書）」2002年12月所収）